

「青森県立美術館」は上向きに凸凹になっている大地に、下向きに凸凹になっている白い構築体が被さって出来た隙間と、その白い構築体をえぐって出来た白い空間を展示室として使用している。トイレはその白い構築体の中に計11カ所あり、基本的にはホワイトキューブ（白い展示室）同様のつくられ方、すなわち白い構築体をえぐってつくられた白い空間となっていて、壁、床、天井、便器はもちろんのこと、手洗器の自動水栓からトラップに至るまでとにかく白い。

壁のタイルは、規格品の50角の磁器質タイルだとその白さが床、天井と違ってしまう。そのため、INAXに特注仕様で数度のサンプル焼きをお願いして、その白さに近づけている。

床は、白いシームレスな床で、汚垂石と同等の機能を兼ねるものとしてエポキシ系塗床材にアクリルウレタン系塗床剤を塗布している。

手洗器や小物置き、ブースドア、荷物掛けフック、トイレットペーパーホルダーは、このトイレのために設計、製作している。それらは50角のタイルに合わせてつくるのではなく、逆にそれらに合わせてタイルの大きさが決められているようにつくられることで、タイルの壁に違和感なく取り付いているように感じさせている。そして、もちろんすべて白い。

と、とにかく細部に至るまで白いことを追求している。にもかかわらず、写真を撮ると少しピンクがかって見える。これはトイレ空間のある部分がピンク色になっているからである。それは、壁のタイル目地。目地材に赤系の顔料をほんの少しだけ混ぜていて、この目地が真っ白な空間の空気をうっすらピンク色に染めているのである。これもタイル同様、数十回に及ぶサンプル製作を重ね、特注タイルの白との取り合いも同時に考慮しながら、一目ではピンクになっていると分からない微妙なラインを追求している。

「青森県立美術館」のトイレで目指したことは、緊張感のある展示（室）を観



チケットトイレ（女子） 天井高を4000mmとし、高さのゆとりをとっている

る前あるいは観た後に、その緊張感をほんの少し和らげるような、パッと華やぐようなトイレをつくることだった。言い換えれば、トイレ空間がピンク色になっていることが目的ではなく、トイレに入った人が気付かなくても、いや気付かないくらいに微妙な心の変化が与えることが目的であった。

実は、ブースドアのロック表示は赤ではなくピンクなんだけど。*

むらやま・とおる——青木淳建築計画事務所／1978年生まれ。2004年、神戸芸術工科大学大学院修士課程修了。2004年より青木淳建築計画事務所。主な担当作品：TARO NASU-OSAKA（2006）、taro nasu bambi（2006）など。



ラッチ 50角タイルに合わせて製作。ラッチが壁に入り込む形になっている



ペーパーホルダー 二連式で上に物を置けるようになっている。仕様は手洗器と同様



手洗器 SUS t=1.5にプールの水槽に使用するアクリルシリコン塗装剤を塗布。手洗器に合わせて自動水栓と水石けん入れも白く塗装



目地サンプル 50角タイルとピンク目地のサンプル。微量の顔料の差で大きく色が異なるため、最終の色までに数十回のサンプル製作を行った